

介護福祉士教育における今日的課題

— アクティビティ・サービス (2) —

田 中 佑 子

はじめに

アクティビティ・ワーカー養成への準備も進み、本年7月1日付の養成指定施設認定書が、「NPO アクティビティ・サービス協議会」より届き、いよいよ来春、福祉学科6期生を迎える2003（平成15）年4月1日より、奈良文化女子短期大学福祉学科に於いても本格的にアクティビティ・サービスについてのカリキュラムがスタートすることになった。

筆者は1998（平成10）年福祉学科の開設時に臨床看護の現場から介護福祉士の教育の現場へ移り、介護福祉士の理想の姿を求めらるる中でアクティビティケア（Activity Care）の言葉に出会った。

看護は病気を持つ人が対象であり、病人は病気を治す第一義の大きい目標がある。介護福祉士は障害や老化のため、本来自分でできる、あるいは、自分ですべき基本的な生活行為が出来にくいいため、誰かの手助けがなければ生活や生命の維持が出来ない人々に援助することを業務とする。より日常的で、より人間的な援助行為であるが故に、単に不足する日常生活動作能力（ADL：Activities of Daily Living）への援助だけでは満たされない諸種の「人間的要求」を伴う。

急増する痴呆高齢者に人間らしい生活を重視し、取り戻させるための「新しいケア」としてActivity Careに大きな期待が寄せられていることを知った。詳細は1999（平成11）年紀要30号「アクティビティケアの一考察」に報告した。

心へアプローチするケアの「音楽療法」や「アクティビティケア」に興味を持ち「課題学習」でも取り上げ、学ぶ中で「アクティビティ・サービス研究協議会」の活動を知るようになった。

研修を受け、アクティビティ・ワーカーの資格を得、更に教員免許も取得した。私自身ワーカーとしても、教員としても実績もなく研究途上であるが、「アクティビティ・サービス協議会」が発足してちょうど10年目に当たる本年にアクティビティ・ワーカー養成の教育施設して承認を得、いよいよ来春より当学に於てもその教育に参加できることは喜ばしい限りである。時の流れを感じる節目の年となった。アクティビティ・サービスの基本理念と技術を学び身につける過程で、より豊かな人間性と深い愛情が育まれ、幅の広い対応力を持つ介護福祉士の誕生が期待できると思う。

来春にスタートを控えて、今一度、幾つかの点について、整理して置きたいと思う。

1. レクリエーション (Recreation) とアクティビティ・サービス (Activity Service)

現在福祉の分野で用いられている福祉レクリエーションとアクティビティ・サービスは目指すところは同じであろう。集英社「国語辞典」には、レクリエーション (recreation) は「余暇を利用して運動や

遊びを行い、心身の疲労回復を図ること、また、そのための娯楽」としているが、アクティビティ・サービスは掲載されていない。一般にアクティビティ (Activity) なる概念は「活動性」や「活動」と認識されているが、1980～1990年代アメリカの要介護高齢者に対する看護的ケアとして開発され、ケアや社会福祉サービスの分野に登場したのが始まりと言われる。「アクティビティとは、歌の会やラジオ体操等の日常のレクリエーション、自発的な勉強会や趣味の会、誕生会や花見等の行事、生活リハビリテーション、朝晩のお祈り等の宗教活動、など日常生活を活性させる全てのサービスを含む言葉である。」と R A P s (Resident Assessment Protocols) に記述されている。

我が国では、デイ・サービス等でアクティビティケアの名称でレクリエーション的なケアが行われるようになって10年余、歴史も浅く、アクティビティ・サービス研究協議会を立ち上げた諸先生方の懸命の啓蒙活動にも関わらず、「生活環境を整え、心身を活性化させ快適に過ごして頂けるよう」サービスするとす、アクティビティ・サービスの概念はまだまだ市民権を得てるとは言えないのが現状であると思う。

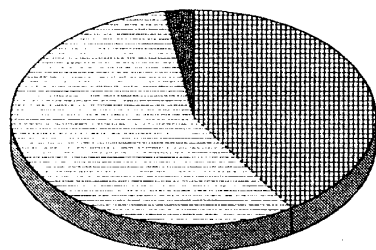
【調査事項 1】

アクティビティケア (サービス) という言葉を知っていますか。

2001年 7月

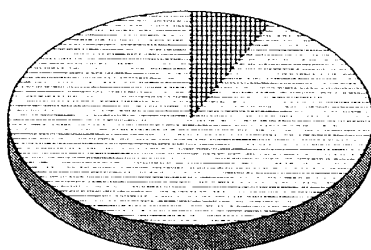
[■はい ≡いいえ ■無回答]

奈良文化女子短期大学学生 94名



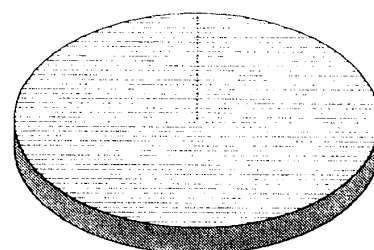
福祉学科 2 回生

回答者39名



福祉学科 1 回生

回答者42名



音楽学科 1 回生

回答者14名

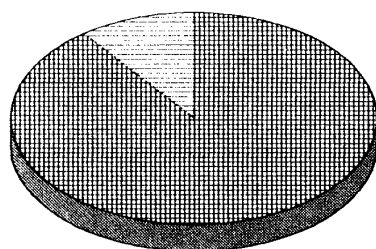
【調査事項 2】

レクリエーションという言葉を知っていますか。

2001年 7月

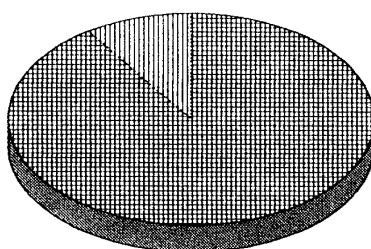
[■はい ≡いいえ ■無回答]

奈良文化女子短期大学学生 94名



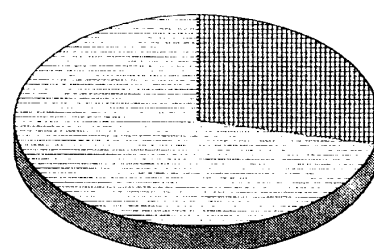
福祉学科 2 回生

回答者39名



福祉学科 1 回生

回答者42名



音楽学科 1 回生

回答者14名

昨年（2001年）当学の学生達に言葉への認識調査を試みたが福祉学科の学生でさえ十分理解できているとは言えなかった。添付したアンケートは2001（平成13）年紀要32号に報告した一部である。

レクリエーション（recreation）の概念はイギリスで発生したと言われる、既に1390年ごろの、イギリスの権威ある辞書『Oxford English Dictionary』に recreation は「食事を共にすることによってリフレッシュすること、軽い食事、（精神的影響および飲食による）元氣回復、滋養」として掲載されていると教本：最新介護福祉全書⑦「レクリエーション援助」に、記されている。

「レクリエーション」という言葉が我が国で初めて使われたのは1922（大正11）年、のちYMCA・YWCA（キリスト教青年会）などを通して、青少年（特に健常者）の育成に必要と、各青少年団体を中心に普及した。

戦後の我が国のレクリエーション運動は連合軍総司令部（GHQ）の指示により文部省が主導する形で社会教育行政の一環として、青少年の健全育成を中軸とした社会教育分野からスタートした。

1947（昭和22）年には「財団法人レクリエーション協会」が設立された。全国的に「職場レクリエーション」「学校レクリエーション」「地域レクリエーション」として普及した。

さらに、第二次世界大戦から経済的復興も成し、高度成長時代にはレクリエーションは「リラックス」「楽しむ」など生活を豊かにする余暇活動として認識された。日本語化されていないまま時代の要請に応え便利に使われてきた言葉であるが、レクリエーションの名のもとに頻回に行われるキャンプや集団でゲームしたり、歌たりって、踊ったりすることがレクリエーションだとする受け止め方が根づいてしまったのだと思う。

2. 介護福祉士とレクリエーション（Recreation）

介護福祉士の業務は日常生活行為への援助である。人々の日常生活への期待が変化すれば自ずから援助の内容も変化する。急速に進む我が国の高齢社会への到来に備えて、厚生省が「介護福祉士」という国家資格を有するワーカーを登場させ、その養成カリキュラムの中に当初より「レクリエーション指導法」が必修科目として位置付けたことは素晴らしいことだと評価されているが、既に一般の人々の日常生活、人生への期待が「食べて寝る」と言う生命の維持だけの日常生活では満足できない時代の要請があったとも言える。平成11年の介護福祉士養成施設等における授業課目の目標及び内容の一部改正にもない2000（平成12）年度から「レクリエーション活動援助法」と科目名が変更された。

「余暇」とは、衣食住などを中心とした「基礎生活時間」と、労働などの「役割生活時間」を引いた「のこりの時間」と捉える概念である。介護を要する人びとは役割時間が減るので当然「余暇時間」が多くなる。この多くなった余暇時間をどのように捉え、援助して貰えるかによって日常の生活の質（QOL：Quality of life）は大きく変わる。

加えて基礎生活時間の衣食住そのものも援助を待って過ごさなければならない。自分の欲求を、自分の意志で、自分のADLで自由に生活できない人びとである。そのままにしておけば、活動性の少ない沈滞しがちな生活になるであろう。そのような沢山の痴呆高齢者や障害者の心身を活性化させ、自立性の回復の方向をさぐり、人間らしい喜びのある、快い生活が過ごせるような援助が期待される。これに応える鍵が正に「アクティビティ・サービス（Activity Service）」レクリエーションにあると注目されるよ

うになった。日常生活の現場の第一線で障害者や高齢者の生活に寄り添い、社会生活や余暇生活への援助も視野に入れてケアに当たる介護福祉士の重要な業務と言える所以である。

3. レクリエーション (Recreation) からアクティビティ・サービス (Activity Service) へ

レクリエーション (recreation) という概念が日本に入ってきて、「スポーツ」「集団活動」を連想さず青少年や活動的な人々のものから、実に50年余を経て、やっと福祉の分野へ到達してきたと言われる。1974 (昭和49) 年「高齢者レクリエーションワーカー養成セミナー」を(財)日本レクリエーション協会は開講、高齢社会到来の時代に対応した。しかし内容的には従来のスポーツ、集団活動的なゲーム、歌、体操、ダンスなどにとどまっていた。

垣内芳子氏は「従来のレクリエーションはアクティビティ・サービスの一部にすぎない」と次のように説いている。氏は1937 (昭和12) 年 Y W C A ・体育師範部学生として初めてrecreationという言葉に出会って以来レクリエーションの指導活動に、さらに1949 (昭和24) 年よりは日本社会事業大学 (当時専門学校) に於いて36年間教鞭をとられてきた大家である。

レクリエーション (recreation) という概念は、1922 (大正11) 年、東京 Y M C A が少年部設立の折り G. S. パターソン氏 (アメリカ) を招いて得た助言「青少年育成のためのレクリエーションが必要だ」として我が国に入ってきた。それ故動的で、集団的なものに偏らざるを得なかったのであろう。

時代は高齢化社会へ移ろうとし、日本社会事業大学に長く席を置く垣内氏は、福祉の理論に照らしても、寝たきり老人や重度の障害者に、歌って踊ってゲームして、などというレクリエーションは適切ではないと、1989 (平成元年「福祉レクリエーションの実践」(ぎょうせい刊) に「レクリエーションは“生活の快”である」との定義を打ち出した。

1990 (平成2) 年 日本福祉教育専門学校に於いて、垣内芳子、廣池利邦、柏木美和子氏などは、「福祉レクリエーションワーカー」養成を1年間夜間通学制で行い、これを機に(財)日本レクリエーション協会から離れ、独自の福祉レクリエーションへの研究に入った。

しかして従来の狭い意味合いで認識される「レクリエーション」ではないと主張するため、既に欧米諸国で用いられている「アクティビティ (Activity)」と改称したと聞く。

アクティビティ・サービスとは衣食住にかかわる生活全般への心配りをし、「生活の活性化」「心身の活性化」はかり、「いきいき」と快く生活していただけるよう援助することである。

従来のレクリエーションは「レクリエーショナル・アクティビティ (Recreational Activity)」とし、アクティビティ・サービスの一部にすぎない。と説いている。

1992 (平成4) 年「アクティビティ・ワーカー研究協議会」設立

1996 (平成8) 年「アクティビティ・サービス研究協議会」に改称

2001 (平成13) 年「N P O アクティビティ・サービス協議会」に改称

(※ 8月3日付 東京都N P O 法人が認証された)

2002 (平成14) 年7月1日 奈良文化女子短期大学は同協議会より

アクティビティ・ワーカー「養成指定施設」と認定され、

2003 (平成15) 年4月1日より養成開始予定

4. 当福祉学科のとりくみ：「課題学習」

◆「課題学習」の生い立ち

当学科1期生が平成11年春、第1段階施設介護実習を行った。これは学生にはもとより、学科にとっても、教職員にとっても記念すべき初施設実習である。終了後実施した学生には自己評価アンケート「今後の課題とする点」をし、内容を整理分析した。教員一同がその内容を踏まえミーティングを重ね今後の対応を検討する中で「課題学習」の構想が生まれた。これらの課題を、時間割の空き時間を活用して、学生たちともっと関わってみよう（平成11年には、まだ「実習指導」の教科のカリキュラム時間は増加になっていなかった）

◇実習指導：Ⅱ（課題学習）（従来の「実習指導」はそのまま2回生前期の別1コマで行う）

- 教科「実習指導」（演習）の中で行う。2回生前期2コマ追加して当てる
- ゼミ形式のグループ学習にする（10名位の学生に教員1名）
- テーマは担当教員が提示する
- 研究したものを小冊子にまとめ、発表会を行う

◇目的

- ゼミ形式による教員とのふれあいの時間を多く持ち個々の学生の個性を引き出す
- グループ学習を体験させ、自己の責任や共同作業の楽しさを学ばせる
- 学生の創造性、自主性、リーダー性を育てる
- 研究的態度を育て、研究発表を体験学習をさす
- 高齢者への理解と共感の心を育てる
- 施設実習に役立ち、実習にやり甲斐を感じらるものをテーマにする

◇初回1期生に対しては、担当教員5名、以下のようにテーマを選んだ

- 忠政敏子：音楽と癒しについて
- 村尾壽美：在宅介護について
- 福原信子：リハビリり歌体操
- 田中佑子：アクティビティケアについて
- 高桑慧子：高齢者の歩んだ道

◇発表会は1999（平成11）年6月28日（月曜日）

I～II時限を使って1210号教室で1回生（2期生）をも招いて、発表持ち時間：25分に大いに盛り上がり、学生たちはそれぞれに達成感を享受した。

◆「課題学習を通じて学んだこと」2回生（1期生）の感想文の中から

◇グループワークに関すること

- グループに分かれて調べていく中で協力しなければできない。実習は一人一人の問題だけど今回は一人一人ではできない、10人がいて一つのことができるんだと思いました。
- みんな頑張っているのを見て私も頑張らなければと思うようになってきました。
- 私達の班はチームワークが良く、楽しくできました。

- グループの人達と分担して協力し、チームワークも養うことが大切だし、学生として人間としてそれがとても尊いことだということも発見できました。
- 初めは正直なところ本当にこのグループの人達とうまくやっていけるか不安でいっぱいだった。同じクラスであってもあまり話をする機会のない人もいたが、一緒にしている中にグループのみんなとも、気さくに話が出来るようになった。
- リーダーとして課題学習を終える事ができたのも、メンバーの一人一人が支えてくれたからだといいます。
- 課題学習の取り組みから一人で悩む事はしないようにしています。相談すれば助けてくれる友達がいる。そう教えられたように思います。課題学習に取り組み、私の中で何かが変わったように思います。
- みんなの姿を見ていると生き生きしていました。これからの勉強、実習も今回みんなでやってきたことを生かして頑張れたらいいなと思いました。
- 大変だったけど楽しくできて良かったです。機会があれば又やってみたいです。
- 苦勞することも挫折することもあったが共に頑張ってくれた。仲間や先生に感謝したい。
- 仲間ってというのはなんてすばらしいものなんだと思えた。
- 本をみんなで協力して手作りで作り上げ、充実感と満足感がありました。この一冊の本をこれからも大切にしていきたいです。
- みんなで協力すれば何でもできると改めて思い、みんなで作る楽しさも同時に学ぶことができ、今回の課題学習はとても良い勉強になりました。
- この課題学習で得たすべてのことは、私にとってこの二年間の学生生活で最高の思い出になることだろう。

◆「課題学習の発表を聴いて」1回生（2期生）の感想文の中から

- 2回生はすごいなあと思った。何かのテーマについで徹底的に調べてまとめて、自分達のアドリブ等があって結構感動した。その反面、自分達も来年、課題学習の時、今回の2回生のようにしっかりできるか不安にも思った。
- 資料も作るのに大変だったと思うけど、良くまとまっていて見やすかったし、とても良かったと思います。
- 2回生の人達が歌を歌ったり踊ったりしているのを見て、こういうのをお年寄りの人達の前で披露してあげたりしたら、喜んでくれて、とても嬉しくなるんだろうなあと思いました。
- 自分たちで考えたのかな？ 考えるとしたらお年寄りの人達もやりやすく、楽しくできるものにしたいです。ビデオもあった、ベットメイキングも2回生になれば私もあんなにうまく出来るようになるのかと思うと早くいろんな事をやってみて、たくさんのお事をうまくできるように成りたいと思いました。
- 在宅介護の先輩の作ったビデオのシーツのしき方、食事のとり方などは勉強になった。
- 先輩達が発表しているのを見て、早く自分もやりたいという気持ちになった。特に「老いを防ぐ体操」として道具を使って踊っているところや、歩けない人でも簡単にやれるような手

や首などを動かすものは、とても魅力的に見えた。自分も高校の頃は課題研究で福祉について研究していたのでとてもやってみたい部分がたくさんあった。

- 先輩方はよく調べたり考えたりしていて驚いた。今日の2回生のいろいろな課題学習をみていて、きちんとしていて私も共感を覚えたので自信がついた。今日の課題学習は2回生の熱心さが伝わり、ためになった。
- これからの2年間福祉を勉強することが楽しみになった。
- もっと勉強したいと思ったのはアクティビティケア、すごく感心をもった。
- 高齢者の歩んだ道についても勉強したいという部分があった。
- 音楽のこともっといろいろ勉強したいと思いました。今日の課題学習を通して自分のやりたいこと目標を見直せた気がします。まずは「介護福祉士」頑張りたいと思います。
- 音楽、楽器を使って演奏するものにはお年寄りが好みそうな曲ばかりだったし、他にもテンポがあまり早くないゆっくりめのもが多くて「あっ福祉学科だな」という気分を味わわせてもらった。
- 先輩の課題学習を聞いていて私自身「福祉を学んでいる」という実感が大きかった。今までずっと講義ばかりだったから実感は少なかったけど、福祉への憧れと言いますか目標が持てた気がします。
- 自分自身では福祉に入って本当に良かったかちょっと迷ってる部分があったので、今日課題学習をみてみんなすごく楽しく発表していたので私もだんだんとやる気が出てきた。
- 私も2回生になったら頑張ろうと思った。今日の発表を見てやる気も出たし、楽しかったので、真面目に福祉の事に取り組もうと思う。
- 先輩のようにすばらしい発表を目標にしたいと感じました。

普段1回生と2回生がふれあう場がないので良いことだと感じました

◆「課題学習」結果・考察

今回取り上げたのは第一回の「課題学習」の結果と流れである。手さぐりで、懸命に取り組んだ初体験である。教員一同も期待以上の成果と評価し、平成11年度第6回日本介護福祉教育学会に口頭発表（村尾壽美）し、紀要31号「実習指導（演習）の展開～グループ別課題研究の試み～」に報告し、今後の課題とした。

◇課題学習が成功した要因と考えられるもの

- (1) テーマに関心を持ち易かった、楽しい活動的なものであった
- (2) 少人数（10～11人）学生と教員の一体感が生まれた
- (3) チームワークを徹底した。グループダイナミックス方式が有効に働いた
- (4) 学習成果をグループワークで手作りで製本した（印刷～製本）
- (5) 時間が限られていた（3ヵ月）時間が足りないと時間外も夢中でやった
- (6) 教員全員非常に熱心だった

◇課題学習がもたらした良い結果

- (1) 学校生活に活気が生まれ、何事にも積極性がみえはじめた

- (2) 専門科目への興味が増した。福祉学を学ぶことに喜びと自信が生まれた
- (3) グループワークを学んだ。グループワークに於ける個人の責任、リーダーシップを学んだ
- (4) 手作りの製本の仕方を会得した。
- (5) 文献学習の仕方、セッションの楽しさを学んだ
- (6) 友情に厚くなった

5. 考 察

2期生、3期生と続け、そして今年は4期生と共に「課題学習」をした。

◇4期生に対しては、担当教員5名、以下のようにテーマを選んだ

- 忠政敏子：高齢者のケアと音楽
～「回想法」を活用したセッションをデザインしてみる～
- 福原信子：リハビリ歌体操
- 田中佑子：生活豊かにする「年中行事」
～アクティビティ・サービスのプログラムを立てるために～
- 高桑慧子：高齢者の歩んだ時代
～高齢者と良いコミュニケーションを作るために～
- 阿南國子：明治、大正、昭和の遊びを通して
アクティビティ・サービスを学ぶ・お手玉を作ろう！

テーマは各担当教員の任されたが、期せずしてアクティビティ・サービスの方向に揃ってきた。

また2期生より、「課題学習」の中で福祉施設に於けるレクリエーショナル・アクティビティ (Recreational Activity) のセッション (session) を実習施設等で実際に体験学習することも加えられ、これも恒例化されようとしている。学生たちには大変好評である。準備その他大変なエネルギーを使うが、それだけに学生たちは達成感と充実感を得ることができ課題学習の学習効果を上げている。

NPOアクティビティ・サービス協議会の理事長垣内芳子氏は

A. S. N. (第24号) (2002/07/20)『10年間をふりかえる』の中で、

- 歌っても、踊っても何の快さも喜びもなければレクリエーションとはい言えない
- レクリエーションは必ずしも集団とするものではない
- レクリエーションは個人の欲求に基づくもの、等と記している。

氏は『レクリエーションとは、生活を楽しく、明るく、快く（こころよく）するための一切の行為である。～行為とは、単に四肢のみの行為でなく、五感つまり視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚などに関連する行為をも含む～』と定義している。

筆者担当グループは去年は「かなはし苑」、今年は「大和園」でセッションを体験学習をさせてもらった。レクリエーショナル・アクティビティの真価を発揮させ、「楽しさ」や「快さ」を喜んでいただく為には、理念の学習と熟達した技術が大切である。セッションを実際に体験学習し改めて、その難しさと重要性を学んだ思いがする。これらの学習を進め、技術を習得するのこの「課題学習」の教科時間に与えられたテーマの一つであろうと考える。

また特筆することは2000（平成12）年4月、3期生より待望の「福祉音楽論」が音楽学科長の伏見強教授の担当で開講した。トーンチャイムやミュージックベル、大正琴などの演奏を学び、明治、大正、昭和の歌にも触れ、学生たちは資質を上げレクリエーショナル・アクティビティのセッションを豊かなものにしていく。

レクリエーショナル・アクティビティ（Recreational Activity）はアクティビティ・サービス全体の中でもテクニックを要する重要なサービスの一つであると、改めて認識するようになった。

おわりに

我が国に於ける介護福祉教育も10年余を経て、内容を見直し充実を図ろうとしている。

介護福祉士の業務に対する人びとの期待も、当初のADLを補う日常生活への援助に留まらず、生活の質（QOL：Quality of life）を配慮した日常生活への援助、支援を重要視するようになった。遊び、楽しみ、趣味活動、文化活動、役割活動、安らぎ、レジャー（Leisure）、レクリエーション（Recreation）等はわき役ではなく、生き甲斐のある日常生活の大切な要素と受け止められるようになった。

これらに答えようとするアクティビティ・サービス（Activity Service）はこれからの福祉サービスの重要なキーワードになると思う。

当学に於いても福祉学科が生まれて5年経過し、来春は6期生を迎える。

また付属高校からは福祉コースの1期生を迎える、付高福祉コースを迎える初年度でもある。

筆者も介護福祉士教育に携わって5年間を過ごした。初代福祉学科長の忠政敏子教授との出会いがあり、「音楽療法」「回想法」「アクティビティ・サービス」など啓発して頂き、夢中で全国あちこちの学会やセッションへ先生に同行して出掛けた。「音楽療法」の学会や会合、セッションへは音楽学科長伏見教授も加わり3人で出掛けたことも幾度か、多くの啓発を受けた充実した5年間であった。これらの出会いは、私に豊かな情操と介護福祉士の教育に対する方向と自信を育ててくれたように思える。

忠政教授の「音楽療法」への期待は、伏見教授の強い思い入れもあり、第3期生より「福祉音楽論」開講と言う形で具現化した。

高齢者の安らぎや喜び、楽しみが理解でき、高齢者に寄り添い、共有できる心ゆたかな、愛ある学生に育てたいと、「回想法」や「高齢者の生きてきた時代」「歌体操」「演奏や歌」「アクティビティ・サービス」など、福祉学科の教員一同で力を合わせて続けてきたゼミ「課題学習」への期待は今年、「アクティビティ・ワーカー養成指定施設」の認定書（2002年7月1日付）として結実した。

介護福祉教育に夢を抱き、痴呆高齢者の音楽療法からスタートしここに至った。これからは本番であるが、今日に導き育てて頂いた忠政教授に心より謝辞をのべ、時代の要請に応える一つの節目の年として、アクティビティ・ワーカー養成認定指定施設のスタートを共に喜びたいと思う。

参考・引用文献

- 福祉レクリエーション・ワーカー研究協議会＝編集
「福祉レクリエーション・実践マニュアル」 中央法規 1994
- アクティビティ・サービス研究協議会（NPO アクティビティ・サービス協議会）編集
「アクティビティ・サービス総論」 中央法規 2000
「A. S. N.（アクティビティ・サービス・ニュース）」
- 垣内芳子・廣池利邦・柏木美和子著「アクティビティ実践ガイド」 日総研 2001
- 受託団体(財)ほけ予防協会 痴呆高齢者ケアプラン査定事業
「アクティビティケア実態調査」他調査報告書 5冊 1996～2000
- (財)日本レクリエーション協会監修：福祉レクリエーションシリーズⅠ、Ⅱ、Ⅲ。
Ⅰ.「福祉レクリエーション総論」蘭田碩哉・千葉和夫 他 中央法規 2001
- 千葉和夫著 「高齢者レクリエーションのすすめ」 中央法規 1997
- 千葉和夫責任編集 最新介護福祉全書⑦「レクリエーション援助」 メガカルフレンド社 1997
- Carol Bowlby／竹内孝仁著・鈴木英二監訳 三輪書店 2002
「痴呆性老人のユースフル アクティビティ」
- 田中佑子著 「アクティビティケアの一考察」 奈良文化女子短期大学 紀要30号 1999
- 奈良文化女子短期大学福祉学科「課題学習」研究抄録 1. 2. 3. 4期生 1999～2002
- 村尾壽美・忠政敏子・福原信子・田中佑子・高桑慧子 奈良文化女子短期大学 紀要31号 2000
「実習指導（演習）の展開～グループ別課題研究の試み～」
- 忠政敏子・田中佑子共著 奈良文化女子短期大学 紀要31号 2000
「特別養護老人ホームの介護現況における～音楽療法の効用について考察する～」
- 日本バイオミュージック学会関西支部・第2回学術大会：発表 (○田中佑子, 忠政敏子) 2000
「介護福祉教育におけるアクティビティケアへの取組み」
- 田中佑子・忠政敏子共著 奈良文化女子短期大学 紀要32号 2001
「介護福祉士教育に於ける今日的課題～アクティビティケア～」
- 日本介護福祉教育学会「介護福祉教育」No.14 2002